浜松南高新聞
発行所
県立浜松南高校新聞部
静岡県浜松市米津町
印刷
浜松共同印刷株式会社

歓喜と飛躍を

未来への幕明け
自らを忠実に生きる

ご卒業おめでとうございます。今、皆さんの前に一つのドラマが幕を下ろそうとしています。「卒業」という名の輝しい幕が。

そして、皆さんの胸には、この三年間の様々な思い出が、走馬燈のように廻っていることでしょう。春の日、希望に胸を踊らせ校門をくぐったこと、夏の日、その太陽のごとく輝く瞳をして友と語りあったこと、秋の日、極限に挑むかのようにスポーツに打ちこんだこと。冬の日、吹きすさぶ北風になお立ちあがったこと、悩み、苦しみ、泣き、笑いして自らの手で摑みとったこと、そんなすべてが、皆さんに語りかけていることでしょう「卒業」その一言にとめられた数多くの思いとともに。

長いようで実に短かったこの三年間、人生の花ともいうべき青春の一駒を皆さんは、この南高校ですごし、自らの歴史を刻みつけてきたのです。最もすばらしい青春の一駒を。

「苦」ばかりの年月だったという人もありましょうが、考えてみてください。人間というものは、悩み、苦しみ、のたうってこそ成長していくのではないでしょうか。悩むことを知らぬ人間、苦しむことを知らぬ人間に進歩はありえません。そしてまた、おかれた状況に甘んじ、ぬるま湯にどっぷりとつかってしまっている人間にも進歩はありません。自らの道を自らの手で切り開く人間にこそ本当の意味での進歩があるのです。

皆さんは、苦しみ悩んだ分だけ前進し、成長しているはずですだからこそ、今、皆さんの前に一条の光に導かれた道が開けているのです。

たしかにそれは、まだ苦難の始まりかもしれません。「一寸先は暗闇」とよく言われます。けれどそれがなんだというのでしょうか。そんなものは、恐れることもない危険にすぎません。なぜならば皆さんには、それに耐え得る準備がなされているではありませんか。人生に安易な道を求めた時、その戦いの修羅場を安易に過ぎもうとした時、人は人生の敗者と化してしまうのです。皆さん、前進してください。自らの手で自らの選んだ道をまっすぐにどこまでも。

南高校を一つの巨大な流れにたとえるなら、皆さんはあふれ出て流れ出そうという激流です。常に目標を踏まえ、行き着く先を持つ激流です。どうかその激流により多くの事を吸収し、より大きな流れになっていってください。一人一人の大きな人という静かなおだやかな流れを持った川となっていってください。

浜名川は音をたてて流れ、深く川はおのずから静かなり—大河となってより大きな海へ瀬をぎ込むその日まで自らと戦い続けて未来を築いていってください。新たな夢をその胸に秘め、一歩また一歩悔いなき人生歩み続けていってください。今は若い、人生のほんの一駒の幕が下りたばかりです。本当の人生は、皆様はそれからなのですから。

そして、残された我々は、皆さんからの最高の贈えもいうべきその勇気ある姿をしっかりと心に刻み、自らもまた自分なりの多くの苦難に勇気を持って立ちむかっていきたいと思います。

厳しい進路の中で

三年間の総括とも言うべき本年度卒業生の進路状況をまとめてみた。まず進学については、例年通り、私大への出願数が最も多く九八〇通と一昨年を五十五名上回ったのを始め、国公立大の出願総数も一九八通とやはり一昨年の一五一通とかなり上回っている。その内わけを見れば、三重大（15）金沢大（5）名大（3）新設の豊橋技科大（10）一期校舞、静大（27）山梨大（23）茨城大（10）他二期校である。私大は日大（80）明治（70）で他早稲田、法政、慶応義塾等名大学への集中化が見られる。国公立大の二本化最後の年ともいわれる今年である。ぜひとも希望通り進学してもらいたいものである。一昨年をはるかに上回る出願数は、本校の甘い雰囲気を打破したかのように思われるがまだまだ厳しさが足りないように思われる。学部に出願数を見てみると一昨年の出願状況を反映して、教育学部等の出願数がふえている他は、例年通り工学部がトップで次いで経済、法学の順である。いずれにしろ将来の自己形成への細い配慮がうかがわれる。不況の反映といえば、またここにも表われている進学志望からの変更が一昨年の約二倍にふえて六十一人が大学進学をめざしたがはっている。就職希望者は、ほぼ例年通りとのことであるが就職者二二名と少々減っている。例年以上の厳しい就職難とのこと、当事者の心構のほどがうかがわれる。業種別にその状況を見ると、製造業（35）卸売・小売業（32）金融保険・証券業（31）サービス業（16）といった具合である。昨年とくらべると製造業が少し減った他は、あまり数の動きはない。一生の仕事を選ぶということは、人生において最も重大な事である。自分の興味をもてる職業を選ぶというのは並みたいていのことではない。さまざまし、多くの悩み、苦しみもあったことと思う。その結果が前記となって表われたのである。最後に、本年度の卒業生の発表ある未来を心からお祈ります。

出願状況

国公立大学	158
私立大学	400
短大	980
各種学校	217
計	1,215

業種別就職者数

製造業	35
卸売業	32
小売業	22
金融ビル業	16
保険他	9
サービス業	10

（卒業生人員数は1月末日、就職者数は昨年12月現在のものを使用）

一年をふり返って

早いもので昭和五十一年度も残すところわずかになった。三年生の皆さんは新しい道へ進むとともになり、私達も職員室に腰掛を二歩ふむことになる。思いおこせば一年々々過ぎて行く事の早さには驚きを感ずにはいられない。一人々々の毎日の生活を省みようよう毎日が何気なく過ぎていないか。

今日は有意義な一日と言えたか。朝起きて惰性のままに学校に身を任せていないか。一日のつみ重ねの大切さが分っているか等。今年度の反省・後悔は来年度へのエネルギーとして昇華してもらいたい。

今年、本校は創立十五年を迎え、また新たに何かを感じ取った人も多いと思う。何事においても平均的な発達の学校に今年花開いた部活も多々ある。

春の大会において大躍進であったサッカー部は"サッカー王国静岡"のベスト16まで進出した。

同部は来年度も期待できそうである。女子バスケット部の例年の如くめざましい活躍が目立った。この部も大いに期待できる。また校内での地味な活動ではあるが、映画研究同好会はその優秀賞に輝いた。他にも熱心な活動をしているところが多くある。毎日を飽きなく練習に、仕事に打ち込んできた部活、同好会があれば、たとえ認められなくとも「やった」という実感をこの学生にたって感じとる事ができるだろう。三年生の先輩諸が本校の時間割るのは、たぶんこの「やった」という満足感であろう。後輩の私達はその満足感を得るために校内での地味な活動で活躍したい。これは部活動のみではなく、毎日の勉強や生活態度、それに学校という集団の中でいかに個人の力を発揮するかにもあると言えよう。成績で首席をとりたいと願って勉強する事も、選挙等せず、真面目に日々を過ごす事も、一つの目的に向かって進むという点では同じだからだ。精一杯頑張って、それでもダメで—そんな事があっても学校はその結果を示す訳ではなくその場の自分の気持ち表す言葉だからだ。ともかくも一年は短い。あの時、この時、自分は何をしていただろうか。先にも書いたとおり、そう考え、反省する事が大切なのだ。

ここで一年間をふり返ってみよう。まず一学期、始業式、入学式何でも始まりは賑いものです。各自希望、願いをいだいた事と思う。二学期の体育大会、金蘭祭に向かった一番の思い出として三年生諸氏の心の中にあるだろう。団体生活は"人"を養成する場でもある。しかし同時に団体としてまとまってしまうと個人個人の集団訓練の中に学び取った点も多くあったと思う。

二学期は、学校行事が多く、一番忙しい時期でもある。体育大会、マラソン大会、冬季運動大会他が行われた。それぞれが思い出の行事だった。やがて受験生以外は待ちに待った冬休みが来た。そんな時が来ても三学期も終りである。カルタ大会、予餞会他の学校行事も済み、あとは卒業式だけである。あっという間の一年だったが、これからは無駄の無い様、精一杯頑張ろうという気がしたのはわたくしだけだったろうか。

一歩誤いなき人生歩み続けていってください。今は若い、人生のほんの一駒の幕が下りたばかりです。本当の人生は、皆様はそれからなのですから。

そして、残された我々は、皆さんからの最高の贈えもいうべきその勇気ある姿をしっかりと心に刻み、自らもまた自分なりの多くの苦難に勇気を持って立ちむかっていきたいと思います。

論説

悔いなき青春

憧れて入学した高等学校の日々の暮らしにも、シラけた風が冷たく吹いてしまっているように感じる。ほぼ義務教育的になってしまった高校教育には、「大学進学」への通路か、或いは「行かねば世間の恥になる」かのどちらかのものが底を流れているのだろうもう一年以上前になってしまったが、僕の中学時代の良き先輩であったある人が高校を退学した。一年間彼には会わなかったのだが、再会した時の、その変わり具合に驚いたものだったその昔は、今頃の季節になると一緒にマラソンをしたものだ何故に彼が、あんな風にぐれてしまったのかわからなかった。

一年の空間の中で彼は俗に言う"不良学生"に変化してしまったのだ。別に彼を責めようとは思わない。無論、世間が悪かったわけでもないだろう。彼の心の中に寒い風が吹いて、本来の彼が何処かに消えてしまったのだろう。彼が嫌いになったわけではないが、今彼に会ったとしても面と向かって話をすることは不可能に近いだろう。"不良学生"と呼ばれてもまだ彼には限りないあの日の強さが残っていると僕は、信じたい。どこかが間違っているのではないか。この世の中。だけど二年の間に人間があれ程変わってしまうものだろうか。たゞばかり考えさせられてしまう。今、彼が何をしているのか知るよしもないでしょうが激流です。どうかその激流により流れ出そうという激流です。常に目標を踏まえ、行き着く先を持つ南高校を一つの巨大な流れにたとえるなら、皆さんはあふれ出て

そんな感想をさらす中に女子生徒も混じっているのには甚だ腹が立つ。

昨年の十一月、勤労学生の高の文化祭に英語クラブ員の方に招待を受けたため朝間させて戴いた。理由があるのだろうが、八時間労働した後に勉学に精を出し、その後クラブ活動をするという大変な中で一生懸命に生きている彼女たちの頭にはいかなる困難にも負けぬ笑顔が光っていた。四年間の学校生活を終えて、もう二つの社会に飛び出して行く彼女たちには毎日の暮らしがこんなに大切がよくわかっているのであろう一つのことに熱中し、遂させて行く彼女たちには感似のできないエネルギーがある。彼女たちにしてみれば、僕たちの平穏な毎日に反感を覚えるのではないだろうかと考えたりもした。僕たちは甘え過ぎている。平穏に生きる彼女たちに比べ、親のすねをかじって、街中をぶらつく高校生たちを見ると僕は彼女たちに申しわけない気がしてくるのだ。

「仕事と学校に追われる毎日の中で、自分自身何をするべきかどう考えるべきか、迷い、そして行動してきました。自分自身の青春を力一杯満ちた体をフルに使い今日の事にぶつかっていきましょう。」卿のパンフレットにはこんな言葉が力強く書かれてあった。彼女たちの青春に悔いはないであろう。

今年も希望と失望の入り混じった受験シーズンがやって来た。高校受験が、一流学校に入って一流会社に勤めるというエリートコースをたどる登竜門だけのものであってはならないだろうか。

「受験地獄」に神やられ「入生は灰色だ」なんて叫ぶ高校生が居るとなると、何のために高校に来ているのかわからなくなる。某新聞の投稿欄に載っていた二主婦の高校生時代だ。

「微笑でむかえた一つの朝に取り組んだこともあった。どうしても納得できなくて職員室まで押しかけたことも再三あった放課後、ソフトボールを楽しんでいる中に日本史の先生が入って来て汗を流されたことも。それはそこで学ぶことが目的で入った学校であって少なくとも今のように大学への通路ではなかった。」このような青春時代はかりが良いとは言われない。勿論今の時代には、それなりの高校生像があっていいはずだ。その理想像が、街中を風を切って歩く醜い高校生であったりしてはならないのだ。

「受験地獄に喰われたから死にたい」「大学入試に失敗したから死にます」——大した甘えである。十八才の春がそんなに簡単に崩れていいものか。それなら大学なんか行く必要なんてない。青春時代の回り道は苦しいかも知れぬ。それも青春に違いないのだ。それも青春に違いないために自分の信じる道を行きたい。回り道でもいいから。

教育の中軸完成
〈増設工事〉
工事も終盤に

本校の校舎の増設工事は十月五日の測量から始まった。因に今回増設される校舎の造りは鉄筋一階建であり、敷設面積は三百一十一・七二平方メートル、総建築費用は一千九百七十万円、建築工事の請負会社は林工組ということである。

新しく校舎が建設される場所は承知の通り、北館と南館とをつなぐ西の渡り廊下の西側である。新校舎への出入りは西の渡り廊下を通して行われることになる。

新たに増築される教室数は合計五室。その内訳は、まず一階からみていくことにするが、普通教室の二部の広さを持つ大会議室、そして普通教室の二分の一の大きさの小会議室（なおこの小会議室は被北高等学校通信員の控室も兼ねる）、普通教室と同じ広さの女子更衣室が建設される。次に二階であるが、一階は南側半分が職上という形になり、北側半分に普通教室七室も若干大きめの進路指導室、保健室が建設される。（詳細は見取り図参考のこと）

各教室の構造は現在使用されている校舎のそれとはさほど変わりがなく、とりたてて言うほどの目新しい装置なども無かれないということである。

なお不慮の災害、例えば火災であるとか、近隣大学の危険が叫ばれている地震等に対する防災面をとってみると、これ対しては万全の処置がとられているということなので安心して新校舎を利用することができるわけである。

なお現在使用されている会議室女子更衣室、進路指導室、保健室等の部屋は内部を改装して普通教室化するということであり、そちらの工事は新校舎増設工事が終了次第、ただちに着手するということである。つまり新校舎増設工事が終って校舎全体がホッとする間もなく真度工事が始まるということになる。

当分工事の喧騒から逃れることはできそうもないようだ。

さて、新校舎完成はいつか、ということが気になるところだが、このまま順調に工事が進行すれば三月十五日に完成となる見通しが濃厚のようだ。わが南校側としても渡り廊下を歩く時、危険だな、と感じた。他にも挙げていけば際限がないわけだが、まあ、このことは工事であったわけだからやむを得ないことであろう。

もう一つは、この工事中騒がしい校舎内での授業である。特に二階の渡り廊下を歩く時、危険だな、と感じた。他にも挙げていけば際限がないわけだが、まあ、このことは工事であったわけだからやむを得ないことであろう。

もう一つは、この工事中騒がしい校舎内での授業である。特に二階の渡り廊下を歩く時、危険だな、と感じた。他にも挙げていけば際限がないわけだが、まあ、このことは工事であったわけだからやむを得ないことであろう。

この工事は、一日平均すると七、八人の方々が、毎日工事に動しまれて来ている。特に冬は風が激しいこの地域において、暫くからも方まで工事を行うということについては、並々ならぬ苦労があったはずである。しかし我々自身の問題として考えてみれば、増設工事に対し深い関心を抱いているかどうかは、やむを得ないことであろう。

新校舎増築に関する説明がなかなか、とりたてて言うほどの目新しい装置なども無かれないということである。

なお不慮の災害、例えば火災であるとか、近隣大学の危険が叫ばれている地震等に対する防災面をとってみると、これ対しては万全の処置がとられているということなので安心して新校舎を利用することができるわけである。

なお現在使用されている会議室女子更衣室、進路指導室、保健室等の部屋は内部を改装して普通教室化するということであり、そちらの工事は新校舎増設工事が終了次第、ただちに着手するということである。つまり新校舎増設工事が終って校舎全体がホッとする間もなく真度工事が始まるということになる。

当分工事の喧騒から逃れることはできそうもないようだ。

さて、新校舎完成はいつか、ということが気になるところだが、このまま順調に工事が進行すれば三月十五日に完成となる見通しが濃厚のようだ。わが南校側としても

意義ある活動

生徒の関心深める

後期生徒会が発足して早五ケ月が過ぎようとしている。

勉強生徒会長を中心としたこの後期生徒会は、前期に比べ大きな行事がないせいかあまり目立った活動が見られなかった。が、生徒会への関心を高めると共に、生徒同志の交流を深めるため数々の活動を積極的に行ってきた。

その活動には、毎年恒例である「カルタ大会」、昼休みを利用して行われる「レコードコンサート」、「弁論大会」などがあげられる。

特に、「レコードコンサート」はささかに行われた。これは、今年になっても数回開かれており私たちの年代にあった音楽を主にして行われた。これは、生徒間でもたいへん評判がよくこれからも続けてほしい集いのひとつである。

これらを通してわかるように生徒会には、〝生徒の交流〟に重点をおいて活動を続けて来た。そこで、会長を中心とする各役員の方々に後期生徒会活動に対しての反省や次期となる前期生徒会に希望することなどを述べてもらうことにしよう。

▼会長　勉強利恭　21日B

生徒会長になって、人の上に立つ事の難しさを初めて知らされた。しかし、その反面自分に責任を持たされるという優越感を感じることもできた。が、なにもできなかった自分を責めたくなる今日この頃である。

しかし、物事をうまくやって成功に導くものは、人の協力や信頼努力であるという事をひしひしと感じさせられた。

人と人とがうまくやっていくにはそれなりの妥協があったりする事も知った。長いことどうもご協力ありがとうございました。

▼副会長　中野裕之　24日B

五七四年度入部の為、文化展が六月に、それとともに生徒会の任期も、三月八月、九月～二月となり、私達も、一月いっぱいまでとなりました。

副会長としての四ケ月というものは、たいへん短く、忙しいもので、自分の考えていた十分の一も出来ないうちに、もう終わりと思うと、肩の荷が降りて軽くなるという気持ちと、残念だという気持ちとが複雑にからみあい妙な気分です。

最後に、貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

▼副会長　南条律代子　27日B

半年間やってきた感想といってもピンとこない。アッという間に過ぎてしまったような気がする。

私たち生徒会はこの半年間、何をしてきたのだろう。目立った働きはなかったかもしれない。そして第一の目的としていた全校生徒の意見の反映の場としての責任も十分果たされていなかったかもしれない。しかし、例え役に立たなくても私たちは私たちなりにそれぞれ生徒会の運営に力を発揮し、少なからずともそれが生徒会のためになったということを信じたい。

▼書記　富田　保　25日B

書記は全く影の存在であり、私たちが中心になって活動するとは、まずなかった。積極的活動という観点からすれば、明らかに努力不足を指摘されるだろう。

また印刷物などで、費用が高いため印刷できなかったものは誠にすまない。（普通は副会長が持つので、あまり表にはでなかった。）

▼副会長　中野裕之　24日B

五七四年度入部の為、文化展が六月に、それとともに生徒会の任期も、三月～八月、九月～二月となり、私達も、一月いっぱいまでとなりました。

副会長としての四ケ月というものは、たいへん短く、忙しいもので、自分の考えていた十分の一も出来ないうちに、もう終わりと思うと、肩の荷が降りて軽くなるという気持ちと、残念だという気持ちとが複雑にからみあい妙な気分です。

最後に、貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

▼副会長　南条律代子　27日B

半年間やってきた感想といっても正直言ってまだピンとこない。アッという間に過ぎてしまったような気がする。

私たち生徒会はこの半年間、何をしてきたのだろう。目立った働きはなかったかもしれない。そして第一の目的としていた全校生徒の意見の反映の場としての責任も十分果たされていなかったかもしれない。しかし、例え役に立たなくても私たちは私たちなりにそれぞれ生徒会の運営に力を発揮し、少なからずともそれが生徒会のためになったということを信じたい。

▼書記　富田　保　25日B

書記は全く影の存在であり、私たちが中心になって活動するとは、まずなかった。積極的活動という観点からすれば、明らかに努力不足を指摘されるだろう。